

松根東洋城

先生と俳句と私と

先生と俳句と私と（抄）

〔前略〕

最初に私達の眼に映じた先生は、一口にいうと、世の常の学校の先生とは全く趣を異にしていた。どこでもあ
る事ではあるが、一体松山という土地は一段所ところろびい鼻びい肩きの
甚しい所で、土地の人といえれば比較的よく互に相許し相
助け合うが、他の土地から来た者は何かにつけて排斥な
どする傾かたむきが多い。先生の傑作「坊ちゃん」が果して松
山を舞台にして松山中学校を描かれたものであったとし

たならば丁度ちようどあれに描かれた様にこの学校も中々面倒な学校であつた。教師と生徒とは、よくごたごたしていて、生徒は教師に中々心服しない、通り掛かる教師を綽名あだなに呼び立てるなどという事はある事になつていたところが中々いたずらな生徒があつて、あらわに理屈をこねたり甚だしきに至つては授業時間前に机をすつかり積上げてしもうて一同をそそのかしてどつかへ隠れてしまひ授業も何も出来ない様にしたり、或は授業中に擲揄やゆ嘲笑やうに笑到らざるなしという有様であつた。こういう風で一、二松山出身の者をのけては教師は何等畏敬の念を以て迎

えらるるどころか「余所者」よそものとしてには生徒の為に翻弄せらるる者が多く面白くない風習であつた。自然師弟の關係の温かいなどという所は至つて少なかつた。

先生はそういう情弊の多い学校へ赴任して来られたのであつたが、謹嚴で真面目な先生に対しては流石さすがいたずらな生徒も毫も乗ずる隙を持つ事が出来なかつた。是は生徒一般の感想であつたろうが、更に仔細に私自身の印象を辿つて見ると、英語の先生だけでもそれ迄まぎびしいぶん沢山に送り迎えたし、その多くの先生達にはまぎびし厳い人もあれば優しい人もあつたが、先生はそのどちらにもきつ

ぱり属するといふ風でなく、無闇に怒りっぽい人でもなければ御世辞の様な事は毛頭もいわれない、授業より外に無用の言はきかれなかった。その英語の教授法についても至れり尽せりで先生の学識が広く高かったからではあろうが、その事に従わるるや極めて忠実で親切でしかも生徒の智識脳力を量ってよく了解のゆく様によく納得するようになされた。私などは特別に語学が好きと思ふ方でもなかったが、先生に教えて戴いてからは英語は面白いものだど心底から感じ出した。会話など西洋人に教わるより先生の教えて下さる方が余程面白くむしろ西洋

人の教師が教えても説明もしてくれないあるものを先生は我々に与えられた。要するに先生は人を教えるに余りある学識と学才とを持っていられた上に教わるべき人達あたの能力をよく了解せられ、さていよいよ愈教を垂るるに方たつては人気とか評判とか云う事は念頭になくただ只誠ゆえんに親切をたるといふ事が余の教師達と大いに異なる所以であつたらしい。



この良師恩師たる懐しい先生が、俳句の上手であると聞いたのであるから添削して戴くべく私はすぐと友人を

通じて先生に手紙を差上げた。それはたしか後の法学士の矢野義二郎君であつたが、それ以来私は句が出来るに従つて君を通じては先生に見て戴いていた。これが私の俳句に於ける先生との接触の初めであつた。

第一回の添削に、陳腐だとか平凡だとか一句一句の批評の中に「ゆで栗を峠で買ふや二合半」という句をほめて戴いてそれに俳諧の本道を得べき動機を得た事を感じねばならぬ。先生は私にとっては俳句の手ほどきをしていただいた方でこの点に於ても忘れることの出来ない恩師である。子規先生を始め後に依て以て色々教訓を得又また

助言を受けた人は多々あるが、俳句に就いての私の師匠は夏目先生一人である。

この先生に添削して貰うという事についても一つ語つて置きたい事がある。その原稿を送るに当って必ず熊本
の友人を介したという点である。というのは私は先生に
直接書信をするのが何となく晴れがましく一種の羞恥を
感ずるのであった。矢野君は帰省の度に先生が君の事を
話していたよとか君の俳句の事など語っていたよなど話
して呉れるので先生はもはやよく自分の事を知ってい
れると分り乍ら^{なが}猶^{なお}直接の音信を^{はばか}憚^{はば}っていた。是は矢張

先生に対する私の畏敬の心に基くには違ひなかつたがさりとして一瞬に恐縮するのではなくて同時に敬慕に堪えぬ情が伴うていたのであつた。一方に畏敬一方に愛慕それに羞恥を感じねばならぬ順序になる。さてそうなるのが

そもそも

抑先生その人の例の表面極めて真面目なのに内部は甚

だ温い情が籠るといふ事と相映照するるのであろう。心

あいえいしよう

の情は犇ひしとこたえ乍ら屹とした森厳さにたやすくは近よれぬかの意中の情人に対するようなものであつたのかもしれぬ。是は私ばかりでなく又この添削の時分ばかりでなく後に親く先生に私淑した人達の始終先生に就て斯こう

いう温蔵の二面のあつた事を見落さざる所であろう。

□

話は先生の閱歴を辿り乍ら一寸横道に這入ちよつとった嫌いはあるが、この時代先生は熊本で俳句の会などへも出られていたらしく俳句を作っていたとされた事であろうが。尚なお是より先松山にいられた時分やまだ東京を去られぬ時分に句も盛にやっていたとされた事と思う。その内私は一高に入るべく東京へ出たので根岸草庵へ通つたりその他東京の先輩友人と共に研鑽する様になつて先生への方の添削は願わない事になつた。先生も亦その後東京へ移られ一高

に大学に教鞭を執られる様になつたので、久しく疎遠になつていた先生を今度は私はお宅へ訪問して行つた。是が私が書齋に於ける先生、否寧ろ教室外むしに於ける先生との対面の最初であつた。その頃はもう例の猫が茶の間から書齋書齋から茶の間と家中を頻しきりに横行し、「吾輩は猫」の材料が族々と醸されつつある時代であつた。先生と一所に飯を食うという事が後には当り前になつて宅へ歸つて食う様な心持になつてしまつたけれど第一回の御飯を戴いた時は只もう情の露で炊いた愛の飯と外思ほかわれなかつた。

この頃には先生ももう俳句を余り作られないで、私も亦先生に俳句の話を試みようともしなかつた。寧ろ先生を折角訪ねて来るといふはもつと大きな用の為めでなければ総ての世の疲れから休む為めに来るか或は却かえつて俳句以外の小説とか文章とかのみならず寧ろ思想上の問題などまで何う方が重になつていた。俳句に關しても別に多くの俳人と交際せられる事もなく只ただ子規氏と交通せらるる位であつたらう。

その内「猫」が出て「幻の楯」が出て先生は「ホトトギス」その他に創作を發表せられるようになり、その後

暫く連句や新体詩をやられる事はあつたが俳句からは益ますますとおざかられた。

又程なく先生は大学を辞されて、朝日新聞社へ入社され、遂に小説家として立たれ、したがって俳句の方は余程稀れな場合を除いた外は、全く作られなかつた。

明治四十三年に先生は大病を以って長与胃腸病院へ入られ、その快復期に於て久し振りで俳句の話が出て、作ろうかといわれて一所に十句ばかり作つた事があつた。之を動機にその後もよく病後の要慎期の退屈きん凌りやうぎにとそそのかしては句作をした。その後の度々の大病の予後よごに

は尚読書や執筆を禁じられていたので書や書画を始められたがその間々ままには時々私が句に誘いなどした。そして古臭い句を作られると私がかまわず「先生の句は十八世紀だ」とくさすので外の人に「東洋城が来ると発句をつくらされるので困る。」などと負惜みを云って居られたという。併しそれも不健康の時期の事で健康が回復するともうすぐ読書三昧それから又執筆三昧と進んで行って句作など打切りである。

その内に昔ほんの少し習われた謡曲が始まる事になって句を作って遊ぶ代りに今度は一所に謡を歌って遊ん

だ。謡は運動になるから先生の様に坐つて書いたりいろ
いろ讀んだりばかりしている人にはよいなどというてす
すめたのが始めであつた。その運動用の謡がいつか下掛しもがか
り連れんの乗ずる所となつて先生の書齋へ本式に宝生ほうしよう新氏あらた
が通うという事になつた。それから先生からか自分か
らかどちらからか言い出して又しても謡に夜を更かす事
が多かつた。先生は下掛で自分が觀世かんぜという二流合同で
盛さかんに乱声を近隣に響きかしたものだ。そうして俳句の事
は頓とんと出なくなつた。それでも先生は私の家の句会に來
て下さつたことが二、三度ほどあつたが、その外には発

句の会などに出られた事は皆無であつた。

句作などなさらなくなつた後には人が短冊などに染筆を乞う者ある時どうかすると短冊に向つて新らしく作つて書かれる事があつたが是とてもほんの気まぐれの出来事で先ずその後は句作はなさらなかつたというてよかるう。

先生の俳句の歴史は大凡斯おおよその如きものである。併し是とても私と先生との關係を辿つての叙説であるから私に縁の遠い処は漏れている訳でその正史に対して是は外伝とでもいふべきであらう。尤も東京へ歸られての後の事

は大体に悉くしている積りだし、又その以前も臃ろおぼ気げ乍ら大体の輪廓位は是で窺われようと思う。

さて先生御自身の俳句の歴史は上述の如しとしてさらば先生の俳諧史上の位置とかいう事はどうかというに、是はもつとよく先生の俳句の全体を講究した上でなくては言えないが、少くも是だけの事は今言えると思う。

即すなわち、先生は俳句界に於ける当面の所謂大立物ではなかつたという事である。というのは私にとってこそ師匠であるが世の一般には先達とか先生とかいう側の方でもなかつたし、さりとして又作家として自ら銘を打って出られ

る様の人でもなかつた。俳句という者が土台先生にとつては御自身の芸術的立場という程の者ではなかつたらしく、寧ろ先生の内にある或者をその時その折序ついで是によければとて俳句に盛られたばかりの事ではなかつたらうか。殊におのずか白おのずからなるこの先生の態度が先生をして所謂俳句界という或範囲の内に押込ましめなかつたのである。斯く先生は俳句教育に関する側も自己製作に属する側も孰れいずも俳句の社会的ふん氛いきの外にあられたが唯先生の俳諧の気分が高く優れているからその作品が自然他より認識せられ高唱せられたに過ぎぬのであろう。要之ようするに先生

の俳諧はもつと大きなものであつた。俳句にのみ依る以上、その俳味は色々な他のものを通して発散していた。即ちそれは小説にも現われたろうし、随筆にも現われたろうし、乃至ないし哲学書画談話行動等一切に示現して衆庶を感化していられた。換言すれば先生の俳諧は俳句を教えるとかよい句を詠むとかいう以上に更に大きな役目を果たされたものといわねばならぬ。「中略」

□

斯かく先生の俳句に就て語つて来ると、どうしても最後そうそつに先生の俳句その者を説かねばならぬ、が是は匆卒そうそつの際

によく全体に亘って究むる余裕もない事であるから今は
 僅に手近に在る先生の短冊の内から二、三を挙げて断片
 的に *deux mots* 「簡単に説明」を費す事としよう、且つ
 それも句その者の評釈に渉る事は避けて寧ろ一句一句に
 よつて一回でも余計に先生のおもかげ 倂しを偲ぶよすがとなす事
 に重きを置き、追悼の意味に於ても紀念の意味に於ても
なるべく 可成最適當な方法を探ろうと思う。先ず第一に

すみれ程な小さき人に生れたし

という句。是は流石さすが先生でなければ云えない事と思う。
 写生とか客観描写とかいう事は多士濟々であるが斯こうい

う理窟の句を作すものは太だ鮮い。元来そういう理想の高い人が多くないからでもあるが。春ののどかな気分の下に生れた小さい美しい董の花、その董の花の小ささが作者固有の情緒にあわれ触れる、そこに董と作者との間に或一致がある、即ちその董の花をめていつくしみ昵近きんになる極きわみ作者が董と合体し同化する、そこに先生の人格が伴いそこに先生の情調が流れる。この種の理想句は兎角とかくに月並に墮して鼻持もならぬのが多い中に是は又非常に高遠な非常に純美な芸術を見せらるるものかな。この句、一面に一種の人生観を胚胎し他面に人情の温か

い処を保有している。「董程な小さき……」という処に自然の一微物に対する人間の省慮せいりよとその美しい同情とがほの見え「小さき人に生れたし」という点に人、人と大きな顔をしていれど観ずれば人亦また天地の間の一粟いちぞくに過ぎぬと悟っていつそ始めから小さい併し穢れも迷いもない董程な小さき物に生れて来たい、との様な人生観が根をさす。この句に斯かかる二方面が現わると同時に先生の斯ういう二面が俥おこばれるではないか。又

ある程の菊投げ入れよ棺の中

というのは、大塚楠緒ななおこ子女史の物故ぶつこの際先生が悼なげまれた

句であるが、是は先生がちようど丁度或時の大病の揚句あげくの事で、先生が女性らしい女性として、常に感心していられた楠緒子さんをこの世から失われた事ではあり尚自分の病氣につけて一入ひとしお哀惜同情の思いに堪えぬものがあつたと見える、この句を見ると何度見てもいつも涙でグツシヨリ濡れている様に思われる。是も前句でいうた様に人の情の温い処から出立している句であるが此方こちらは又更にそれ一方で走っている。或人恐くは世間の多くが先生を以てすこぶ頗る人情に疎い偏屈な冷淡な人の様に思っているが、若もしそんな見えがあつたとせばそれは物に覆われている時

で先生の胸中胸底は当まさに温い情の源泉たる心の焰がもえていたのである。先生は句を作る為めに句を作られた人でないから徒いたずらに虚偽な句を作つて居られぬ。洵まことにこの句の如き先生の温かい美しい人情が溢れ流れているではないか。自分以外の人には総て反抗的だとか学問以外に人情を解しないなどという世評は太はなはだしい誤解である。先生は唯物ただの順なるを立場にせられた、故に物順なれば唯々いとしていられるが一旦順でないと何人なんびとも容易にその関所を越えしめられないばかりである。

お降さがりになるらん旗の垂れ工合

蓮の葉に麩ふはとゞまりぬ鯉の色

いかにも自然で面白い。余の人だと見た儘ままの写生にして
もそこに多少の技巧を用ゆる、又多くは技巧を凝らして
却かえつて自然に遠いものにして仕舞うが、先生のは始めか
ら技巧などという事は更に無頓着である。それは誰しも
句作の心得はそうなければならぬが先生程云いたい事だ
け言い出して知らん顔をしているという様なのは近代に
は珍らしい。想うに是は先生の頭が非常によいので透視
といつか何といつか物なり事なりとに角句境が疾とくに頭
の中に写ってしまつて写つたらそのまま直ぐ現われ出る

という風に句が出来一向に理屈がなく自然に無造作に万事行く点が当代に尊く有りがたい。この無造作な淡泊な点はやがて先生の江戸子気質を窺わしめるにも足る。晩年先生は先生一流の画をよく描かれたが、固より習われたのでも何でもない言わばまあ自己流の画であつたに拘かからず矢張拘わ泥わりしない無造作な斯ういう点がよく出ていた。

蓮切りに行つたげな縁えんに僧を待つ

良寛に毬まりをつかせん日永かな

蓮の句の如きは見たなり思うたなりを言いたい様に言い

捨てた前句の様な無造作が茲ここにもあるが是は亦また句に現われた境涯その者が随分と磊落らいらくである。毬の句に至っては磊落を通り越していつそ呑気なものである。先生は書に於ても良寛をほめて居られ現にその幅ふくをも所持して居られるがそれも畢竟良寛の人物を面白く思っていていられた事と並行していたに違いないが、この句でも面白い妙な坊さん良寛が一生子供を相手に遊んで暮らしたという事に立停つて見ている事が既に面白いが春の日の永きにつけてもその坊さんに毬をつかせようと思いつくなどは奇想であり又呑気なものである。殊にその良寛に一番毬をつ

かせて見よう、と一寸考える処などは蓋し解脱げだつの人でなくて
は考え得まい。良寛が先生か先生が良寛か毬が良寛か先生が毬か、
先生にこの種の磊落呑気な気分もあつた。今の俳句というもの
とかくむずかしくやかましい今日の世の中にこうした呑気な句が
出来るという事に先生の貴い余裕を思わせるというのだ。〔後略〕

（『新小説』臨時号、大正六年一月）

日本文学電子図書館

先生と俳句と私と (抄)

著 者：松根東洋城

制作者：宮澤一郎

底 本：「漱石追想」

岩波文庫、岩波書店

2016年3月25日 第1刷発行

日本文学電子図書館